

森林が支えてくれる
私たちの生活
—SDGsと森林—

森林による文化的サービス②

— 林業遺産 —

土屋 俊幸 Tsuchiya Toshiyuki 東京農工大学 名誉教授

専攻は「林政学」。2019年から現在に至るまで、林政審議会の会長を務める。ほかに、(一財)林業経済研究所所長や、(公財)日本自然保護協会執行理事を兼任している

今回も、森林の生態系サービスのうち文化的サービスについて取り上げます。この連載が文化的サービスに注目している理由としては、前回の説明の中で、森林の文化的サービスが「現代社会では、人間が人間らしく生きていくために欠かせないものとなりつつ」あるという言い方をしました。現代になって急激にその価値が注目されるようになった森林の生態系サービスとしては、このほかに気候変動の緩和策における森林および木材の機能(CO₂の吸収源)がありますが、このことについては次回で扱うことにし、今回は、ごく最近になって広く認識されるようになった林業遺産を取り上げます。

「林業遺産」の対象

皆さんは、「林業遺産」という名前を聞いたことがあるでしょうか。最近、「遺産」というネーミングが地域づくりや文化財の保全・活用の分野などではちょっとしたブームになっていて、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の「世界(文化・自然)遺産」「無形文化遺産」、日本の文化庁の「日本遺産」、FAO(国際連合食糧農業機関)の「世界農業遺産」など、いろいろな「遺産」への登録が各地域で行われるようになっていきました。ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」のように、具体的な地域やモノではなく、境界や範囲が必ずしもはっきりしない「文化」が対象の場合もあります。ここで取り上げる「林業遺産」は(一社)日本森林学会が選定元で、かなりユニークな「遺産」といえます。「林業遺産」は2013年度から選定が始まり、2021年度までに48件が選定されています。対象は、「林業景観」「林

業発祥地」「林業記念地」「林業跡地」「搬出関連」「建造物」「技術体系」「道具類」「資料群」の9種類で、例えば、「搬出関連」としては「我が国初の森林鉄道『津軽森林鉄道』遺構群及び関係資料群」(2017年度)、「林業発祥地」としては「天然林施業実践の森『東京大学北海道演習林』」(2014年度)、「資料群」としては「木曾式伐木運材図会」(2016年度)などが挙げられます。

「林業遺産」と文化的サービス

はじめに、林業遺産が森林の文化的サービスとどのように関係するのか? について、説明します。柴崎茂光氏、八巻一成氏を中心とする研究グループは、最近、包括的な研究書として『林業遺産 保全と活用に向けて』(東京大学出版会、2022年)を刊行しましたが、その中で、林業を「山との関わりを持ちながら、木材(用材や薪炭材)・動植物・楽しみ・畏れといった有形・無形の恵みを受ける活動や、山地災害などを軽減するために行う活動」と定義し、林業遺産は、上記のような定義の「林業活動を通じて、地域の歴史の中で何らかの意味を有する有形物または無形物」としています。我々がある有形物/無形物を林業遺産と認識することは、その有形物/無形物を、人が自然(森林)に働きかけ、その結果としてある恵みを受け取る活動(林業)の歴史的成果として価値があると、社会として認識し、「再価値化」「資源化」を図ったことを意味します。つまり過去に人が受け取った森林の生態系サービス(供給サービス、調整サービス、文化的サービス)を、もう一度、文化的サービスとして生き返らせる営為といえるでしょう。

屋久島の「林業遺産」

ここまで説明してきても、恐らく読者の皆さんの多くは、林業遺産についての具体的なイメージが描けなくて困っておられるのではないかと思います。次に、2016年度に林業遺産に選定された「屋久島の林業集落跡及び森林軌道跡」について、前記『林業遺産』をもとに簡単に紹介するとともに、その課題について述べたいと思います。屋久島は、鹿児島市から約135km南方に位置する離島ですが、島の中心部には九州最高峰の宮之浦岳(1,936m)をはじめとする奥岳と総称される山々が^{きつりつ}屹立し、山腹には屋久杉と呼ばれるスギの天然林が広く分布する一方、海岸部には亜熱帯性の植生が広がるなど、自然に恵まれた島です。1993年には山岳部を主とした地域が日本で初めて世界自然遺産に登録され、世界遺産登録後は、縄文杉と呼ばれるスギ巨木が多くの観光客を集めて観光地として発展してきました。

しかし、その前史をたどると、江戸時代から豊富な森林資源を対象とした森林開発が始まり、第二次世界大戦後、伐採量のピークを迎える1960年代まで、林業が島の主要産業だったので。国有林で伐採された木材を搬出するための森林軌道・鉄道は1922年から敷設が始まり、第二次世界大戦後には島内各地で延伸され、軌道沿線奥地には林業集落が形成されました。しかし、急激な森林開発に伴う資源枯渇から1970年には最後まで残った最大の林業集落・小杉谷が閉村し、一方、住民による原生林伐採反対運動の活発化や全国の国有林の生産量縮小への方針転換もあり、島内の林業は急速に斜陽化していきます。この過程で、林業集落跡、森林軌道跡は一部を除いて放置されるままとり、また新たな森林施業の実施に伴って破壊され、さらに記録、記憶からさえも抹消されることとなりました。産業遺構、生活遺構として価値のある

写真 屋久島林業集落住居跡



柴崎茂光氏撮影

文化財が、行政にも、地元住民にも認識されないままに消滅する危機、「なきもの」にされてしまう危機にあったといえます。

実は、このような状況が大きく変わったのは「林業遺産」制度の存在でした。国有林を管理する林野庁は、屋久島の林業遺構を「林業遺産」とする方針に転換し、遺構の破壊等を避ける措置が研究者と協働で行われるようになりつつあります。今後は、屋久島町や住民との協力の下、屋久島の林業遺産の価値を高める努力がなされるようになり、例えば教育観光利用への活用も考えられるようになるかもしれません。

おわりに

この屋久島の事例でみたように、林業遺産に対する価値はその時々での社会の状況や環境によって、どんどん移ろっていきます。しかし、遺産は一度壊してしまったら、もう元には戻りません。また、林業は森林という自然の利用のかたちなので、その痕跡はすぐに「自然の中に埋もれ」てしまいますし、そもそも人間の営為自体が「森林の中に埋め込まれて」いて遺産だと気づかない場合も多いものです。そこで重要になってくるのは、多様な価値観を大事にする考え方、自然を多様な視点から見る目、時間の流れの中で物事をとらえる姿勢でしょう。

そして、これはまさにSDGsの考え方そのものではないでしょうか。